

超・少子高齢化が進む過疎地域における 公共政策のあり方について —熊本県芦北郡芦北町を事例として—

山中 進・岩岡中正・伊藤洋典
嵯峨 忠・上野眞也・山下永子

1. 研究の目的

近年、少子高齢化の影響は、全国の地方自治体の政策のあり方に大きな課題を提起している。とくに山間僻地を抱える中小の自治体は、地域活性化の取り組みを進めているものの、その効果は全ての自治体に及ぶものではない。人口が小規模ながら、広い面積を有する過疎地域に暮らす住民に対して、今後どのような公共政策を展開していくかは、地域の緊要な課題となっている。

本研究は、日本の国土面積の約70%近くを占める中山間地域が抱える種々な問題に対して、新たな視点から、住民が安心して暮らせるための条件づくりや、そのために必要な公共政策および政策実施のためのコスト等について、明らかにしていくことを目的としている。

2. 研究対象地域と方法

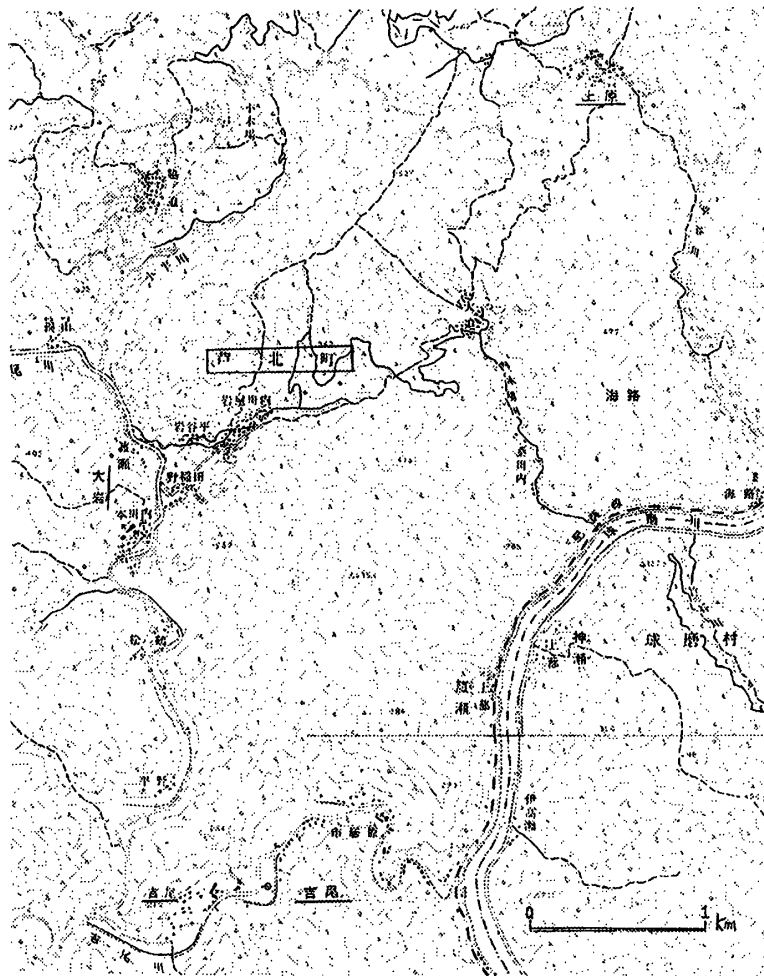
研究地域は、昨年度予備調査を実施した熊本県芦北町の3地区（上原・大岩二・吉尾）とした（図1）。地域の実態把握には、行政資料・統計、歴史文書等の分析とヒヤリング調査から地域の特性を明らかにし、地域の変容に関しては、産業・土地利用の変化、住民の質的变化、家の意識と家族構成の変化等の調査・分析を通して把握する。また、中山間地域での暮らしを住民がどのように考え、地域での暮らしをどのように価値づけているかを、アンケート調査を中心に分析する。あわせて、行政資料等による地域の政治的資源とインフラの整備、行政サービスの獲得状況についての分析も行う。さらに、若年人口の激減から学校統合が進む地域において、中学生がどのようなことを考えているかを意識調査する。

こうした調査を通して、少子高齢化の影響が日本の地域にどのような課題を投げかけているかを明らかにし、新たな生活圏（公共圏）の構築と豊かさの創造について、公共政策の面から1つの提案をすることができると思う。

3. 地域の概要

(1) 上原地区

標高約400mの山間地に位置している。24世帯、65名（2000年12月）が生活し、高齢化率は46%で



(国土地理院 平成10年12月1日発行、「田浦」「佐敷」図幅による)

図1 研究地域

ある。かつては養蚕業が盛んであったが、今は桑園も荒廃している。この地区では、住民自ら生きがいを見つけようと、2001年に臼太鼓踊りを19年ぶりに復活したり、「そば」を地域づくりに活かすため、休耕田で栽培を始めたりして、活性化への気運が高まっている。

(2) 大岩地区

旧吉尾村の人口の52%を占める232世帯、627人(2002年)が居住する。田浦町に隣接する中山間地で、かつては和紙製造や銅の採掘が行われていた。働き手の多くは佐敷・湯浦や八代市へ勤めにでており、昼間は高齢者のみの世帯がほとんどである。和紙製造や伝統芸能の復活に取り組む活動が行われている。なお、今回の調査では、この地区のうち大岩二の行政区(世帯数43、人口134)を対象とした。

(3) 吉尾地区

旧吉尾村の行政の中心地で、現在も芦北町役場出張所、町立診療所、町立中学校などがおかれている。40世帯117名(2000年12月)が居住する。地区の大半は山林によって占められているが、急峻な

ため生産性は低い。また、狭隘な谷間には田畑の分布がみられる。地区を流れる吉尾川では、中学生がゲンジボタルの飼育をしたり、夏季には河川を利用したイベントも盛んである。

4. アンケート調査報告

アンケート調査は、上原・大岩二・吉尾の3地区住民の協力を得て、質問紙法と面接法を併用して行った。2002年11月20日は上原で、11月23日は大岩二、翌日の24日は吉尾で実施したが、面接による世帯調査はきわめて有効な方法であった。調査の対象となった各地区の世帯数・住民数と回答数・回答率は表1に示したの通りである。なお、あわせて芦北町と3地区の男女別の年齢階層別人口構成(調査時)を示しておいたが(図2)、今後、これらをもとに検討を進めていく。

表1 調査対象世帯数・住民数と回答数・回答率(地区別)

	世帯数	世帯回答数	回答率	住民数	住民回答数	回答率
上原	24	17	70.8%	63	28	44.4%
大岩2	42	22	52.4%	116	61	52.6%
吉尾	40	29	72.5%	112	47	42.0%
合計	106	68	64.2%	291	136	46.7%

注) 小数点第2位四捨五入

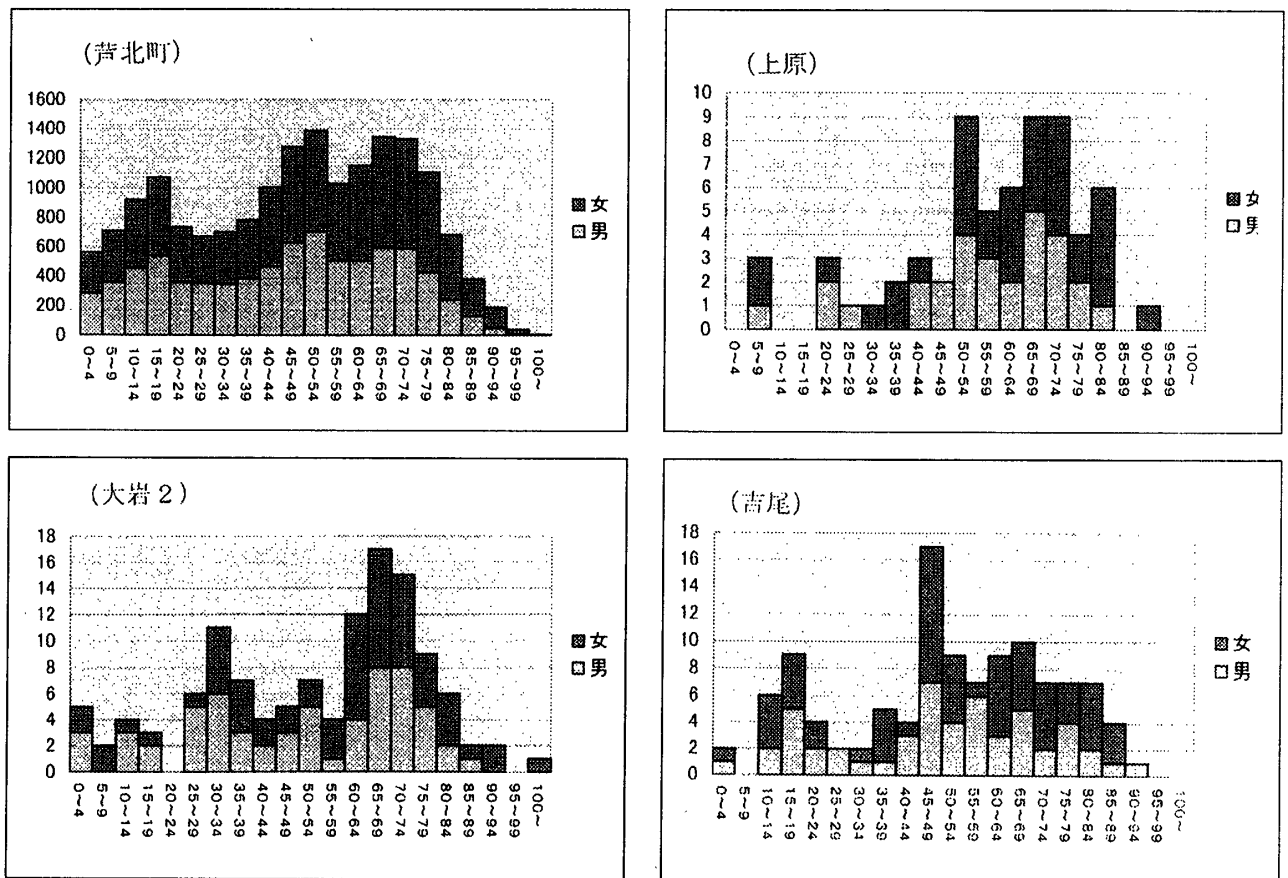


図2 地区別・年齢階層別人口構成比(男女別)